【学力向上フロンティアスクール中間報告書】

都道府県名	熊本県

Ⅰ　学校の概要（平成１５年４月現在）

学校名	宇土市立　宇土小学校								
学　年	１年	２年	３年	４年	５年	６年	特殊学級	計	教員数
学級数	４	４	４	４	４	４	３	２７	３４
児童数	１３６	１５９	１３５	１４４	１２６	１４６	６	８５２	

Ⅱ　研究の概要

１．研究主題

「自ら学び、自ら考える　ひかりっ子の育成をめざして」
～　基礎・基本の確実な定着を図り、
一人一人のよさを生かす「かかわり」のある指導法の工夫　～

２．研究内容と方法

（１）実施学年・教科

全学年　算数（子どもの理解度に差が出やすい教科であるため）

（２）年次ごとの計画

平成14年度

○　テーマ
「自ら学び、自ら考える　ひかりっ子の育成」
～　基礎・基本の定着を図り、一人一人のよさが生きる指導法の工夫　～

○　仮説
仮説１　算数科の授業を中心に、基礎・基本として教師が指導すべき内容を洗い出し、単元の中あるいは一単位時間の中にこれらが定着するような手だてを取れば、自ら学び、自ら考えることのできる子どもを育成することができるであろう。
仮説２　かかわりあいを重視した教材開発と、かかわりあいを深める学習活動、かかわりあいを生かした評価活動を工夫することにより、子どもたちは能動的に学習に取り組むようになるとともに、学ぶ楽しさや充実感を味わうことができ、自ら学び、自ら考えることのできる子どもを育成することができるであろう。

○　研究の内容・方法
研究に取り組む過程で子どもの受け身の姿勢を変えていくためには、教師自身の意識の改革を図り、子どもたちが主体的に活動する授業を創っていく必要がある。そこで、本校では算数科を中心に問題解決的な学習や体験的な学習などの能動型学習を展開することにより、子ども一人一人が自ら課題を意識し、解決方法や解決計画を考え、友だちと協力しながら課題追究をし、解決しようとする子どもの姿を求めて研究を進めていく。また、基礎・基本の定着を図り、一人一人のよさが生きる指導法の実践研究を進めていく。
（１）個に応じた指導法・指導体制の工夫
・効果的なＴＴの活用、少人数指導の工夫
・一人一人のよさを発揮する場、互いのよさを認め共感しあう場の工夫
・補充学習、発展学習の教材開発
（２）算数科の基礎・基本の明確化とその定着を図る。

・各単元ごとの観点別評価規準と評価基準の明確化
・繰り返し学習を通して「基礎技能」の定着を図る。

（３）学習意欲と主体的に学ぶ態度の育成
・問題解決的学習の指導過程の工夫
・一人一人のよさを引き出し、わかる授業をするための基礎となる学級集団づくり

（４）人的環境、物的環境の整備
・能動型学習を支える情報源としての環境整備

平成15年度

○　テーマ

「自ら学び、自ら考える　ひかりっ子の育成をめざして」
～　基礎・基本の確実な定着を図り、
一人一人のよさを生かす「かかわり」のある指導法の工夫　～

○　仮説

【仮説１】　［基礎・基本の確実な定着を図るために］

学習活動に必要と考えられる基礎・基本を習得する時間を設け、全ての教育活動の中で計画的に取り組めば、自力解決の力や自己表現の力が伸び、自ら学び自ら考える子どもを育成することができるであろう。

【仮説２】　［一人一人のよさを生かす「かかわり」のある指導法を工夫するために］

子どもともの、子どもと子ども、子どもと教師がかかわり合いながらよりよい考えに高め合っていくような学び方を身につけさせ、ともに学ぶ楽しさや分かる喜び感じることができるようにしていけば、自ら学び自ら考える子どもを育成することができるであろう。

○　研究内容・方法

研究に取り組む過程で子どもの受け身の姿勢を変えていくためには、教師自身の意識の改革を図り、子どもたちが主体的に活動する授業を創っていく必要がある。そこで、本校では算数科を中心に問題解決的な学習や体験的な学習などの能動型学習を展開することにより、子ども一人一人が自ら課題を意識し、解決方法や解決計画を考え、友だちと協力しながら課題追究をし、解決しようとする子どもの姿を求めて研究を進めていく。また、基礎・基本の定着を図り、一人一人のよさが生きる指導法の実践研究を進めていく。

（１）指導体制の工夫
・ゆとりがあり、学力をつける日課表の工夫
・６年間を見通した指導体制の工夫
・教科担任制の導入

（２）個に応じた指導法の工夫
・効果的なＴＴの活用、少人数指導の工夫
・一人一人のよさを発揮する場、互いのよさを認め共感しあう場の工夫
・補充学習、発展学習の教材開発

（３）育てたい力の明確化とその確実な定着を図る工夫
・基礎・基本の明確化とその確実な定着を図る工夫
・繰り返し学習の時間の明確化と確実な実践

（４）学習意欲と主体的に学ぶ態度の育成
・問題解決的学習の指導過程の工夫
・一人一人のよさを引き出し、わかる授業をするための基礎となる学級集団づくり

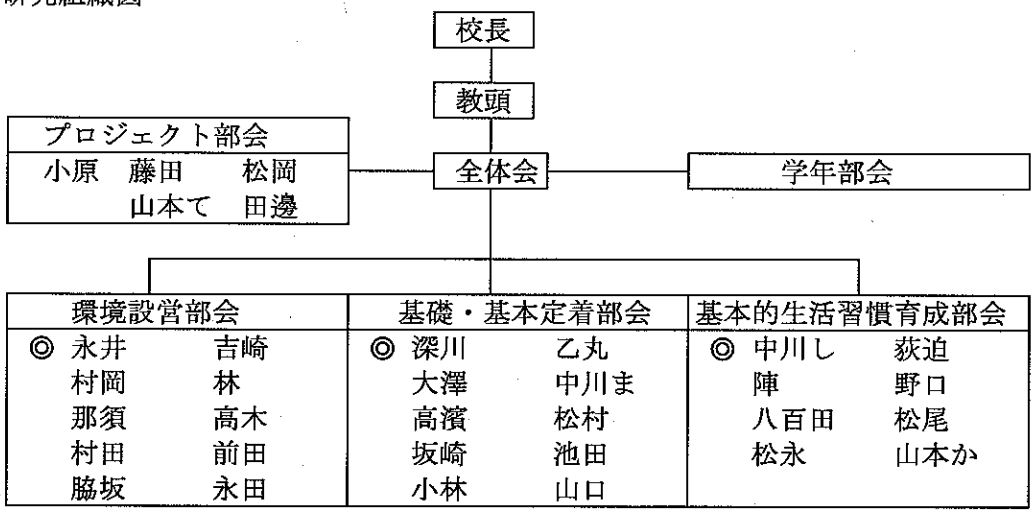
・学校、家庭、地域社会との連携を図る。
・自ら学ぶことができるようにするための学習方法の指導
（５）人的環境、物的環境の整備
・能動型学習を支える情報源としての環境整備

＊昨年度の中間報告書の内容から変更した点
・テーマ、仮説の部分を昨年度より変更、基礎・基本の確実な定着と、一人一人のよさを生かす「かかわり」のある指導法について強調した。

平成16年度	同上

（３）研究推進体制

○研究組織図



＊　昨年度は校長・教頭以下、専門部代表による研究推進委員会を設けていたが、人数が多く活動しにくい面があった。そこで、今年度はプロジェクト部会を設け、人数を少なくすることで、活動しやすくした。また、専門部会を３部会設け、各部会毎にそれぞれ責任を持って活動するようにした。

Ⅲ　平成１５年度の研究成果及び今後の課題

１．研究の成果

○　成果

（１）　フロンティアスクール研究指定を受け、児童の学力向上のための授業づくりや基礎・基本の定着に向けた取り組み、学習のしかたを身につけさせるための取り組み、日課時間の工夫など、適宜反省を生かし、修正を加えながら実践を積み重ねてきたことで、子どもたちが落ち着いた雰囲気の中で学習に取り組み、自分の課題を的確に把握しながら、その課題を解決し、学力を自分のものとしていくための素地づくりができつつある。

（２）　授業研究を中心に研究を進めてきたことで、徹底指導と能動型学習を効果的に組み合わせた授業を構築することができるようになりつつある。

（３）　算数科を中心に、少人数指導やティームティーチング（TT)を全学年導入し、その方法の研究・実践にあたってきたことで、一人一人の子どもに応じたよりきめ細かな指導が可能になり、「学習内容がよく分かる」「もっとやりたい」など、子どもたちが意欲的に学習に取り組む姿が見られるようになってきている。また、ワークテスト等の数値からも、ＴＴや少人数指導を導入し、その指導のあり方を工夫改善していけば、児童の力は確実に向上していくであろうと考えられる。

【標準学力検査の結果】　　（平成１３年度と平成１４年度の比較）

学　年	教科	全国偏差値平均（１３年度）→（１４年度）	総合成就値平均
現２年	国語	５２．７	
	算数	５３．３	
現３年	国語	４８．８　→　５２．３	＋４．３
	算数	５１．３　→　５２．９	
現４年	国語	５２．７　→　５２．８	＋４．２
	算数	５３．０　→　５７．７	
現５年	国語	４８．２　→　５０．１	＋２．４
	算数	５１．０　→　５３．０	
現６年	国語	５３．０　→　５２．２	＋３．４
	算数	５５．９　→　５７．３	

【TT における学力向上に関する結果の例】
現４年生は週３時間のＴＴを行っている。昨年度末の学力検査の結果とワークテストの結果（１・２学期の全単元の合計）を比較してみると、以下の通りである。

	昨年度	今年度
評価基準Ａの割合	６０％	７７％
〃　　Ｂ	２９％	２０％
〃　　Ｃ	１１％	３％

単元	小数	変わり方
学級平均	93.8	92.3
期待得点（全国平均）	８３	８３

全体的にみても評価基準Ａの児童の割合が増加し、基準Ｃの割合が減っている。特に、TTとして重点的に取り扱った「小数」の単元においては、それまでに指導した単元と比較しても、大変大きい伸びを示している。

【少人数指導における学力向上に関する結果の例】
６年生は学級を習熟度別に２分割する少人数指導を行っているが、少人数指導に入る前（５月）の単元と、少人数指導を実施したあとの単元（２月）をワークテストの結果で比較してみると、以下の通りである。

	５月（分数）	２月（体積）
評価基準Ａの割合	７５％	８９％
〃　　Ｂ	１７％	８％
〃　　Ｃ	８％	３％

単元による難易度の違いはあると考えるが少人数指導後は評価基準Ａの児童の割合が増加し、基準Ｃの割合が減っている。

（４）　育てたい力を整理し、全教科の基礎となる力を全校一斉の朝読書や朝学習を行うことで、教師の共通理解と共通実践ができ、聴く力や読む力、計算する力など、効果が現れてきている。

（５）授業最初の５分間の徹底指導（１００マス計算やフラッシュカードの活用）により、算数学習の基礎となる計算力の向上が認められ、学習への意欲化にもつながっている。

（６）　各単元毎に評価規準を作成し、評価と指導計画を一体化することで、評価結果を指導に生かしやすくなった。また、基準Ａ（十分達成）に達した子どもや、基準Ｂに達しない子どもへの手だてを指導案の中に具体的に示すことで、個に応じた指導がしやすくなった。

（７）　毎時間、算数振り返りカードやノートに感想を書くなど、子ども自身が自己評価をすることで学習に対する意欲・関心が高まり、自分がどこまでできるようになったのか自己理解を深めることができつつある。教師は子どもたちのノートに目を通す機会が増え、個々の学習状況をより把握できるようになった。

（８）　各専門部会の活動で家庭学習の習慣化の必要性等家庭への啓発や、学習環境を整備することで基本的な学び方についての意識化が進んできている。

（９）　子どもともの、子どもと子ども、子どもと教師のかかわり合いの系統性や、それに対応した指導法が明確になりつつある。互いにかかわり合うことで、自分中心であった子どもの中に他者意識が生まれ、コミュニケーション能力が段階を追って育成されていった。、

○　課題

（１）　個に応じたきめ細かな指導を行うためには少人数指導やＴＴは有効な指導形態である。しかし、本校は施設・設備面が充分ではなく、習熟度別コース学習や課題別コース学習などを実施したくとも、空き教室などがない状況である。さらに、学級数が多く（２７学級）特別教室の配当や専科、ＴＴ、少人数指導などの配当を考えると弾力的な時間割の運用が難しい。

（２）　現在取り組んでいるＴＴや少人数指導だけでなく、教師の個性も尊重し、教師の得意分野を生かした教科担任制の導入（今年度は高学年で一部導入している）や、小学校６年間を見通した指導形態や学習形態の工夫を図っていく必要がある。

（３）　より一層の日課時間の工夫やノーチャイムデーの取り組みなど、児童が積極的に学習に取り組む姿勢づくりを推進していく必要がある。

（４）　朝学習の効果的な活用、家庭学習の仕方、基礎・基本を定着させるためのドリル問題作成など、授業を補完していく諸条件について、その整備・充実を図っていかなければならない。

Ⅳ　学力等把握のための学校としての取り組み

・定期的な「標準学力検査」の実施（国語・算数を毎年２月に実施）
・「基礎・基本の達成度評価テスト」の実施（国語・算数を１月に実施）
・「ゆうチャレンジ」の実施
・宇土市で作成した「基礎・基本問題テスト」の実施
・「学習に対する意識調査」の実施

Ⅴ　フロンティアスクールとしての成果の普及について

・公開授業研究会の実施
　日時　　：平成１６年　２月　４日（水）
　テーマ　：「自ら学び、自ら考える　ひかりっ子の育成をめざして」
　対象　　：宇土市教育委員会及び宇土市内小・中学校の教職員他管内・管外の教員

・学力向上フロンティアスクール事業についての内容説明会の実施
　日時　　：平成１５年１２月
　対象　　：本校児童の保護者

・フロンティアスクール２年目の取り組み実践発表
　日時　　：平成１６年　１月２９日
　対象　　：宇城学力向上推進協議会会員

・「平成１５年度研究紀要」冊子を宇土市教育委員会及び市内の幼、小、中学校に配布

【新規校・継続校】　□１５年度からの新規校　■１４年度からの継続校

【学校規模】　□６学級以下　□７～１２学級
□１３～１８学級　□１９～２４学級
■２５学級以上

【指導体制】　■少人数指導　■ＴＴによる指導
■一部教科担任制　□その他

【研究教科】　□国語　□社会　■算数　□理科
□生活　□音楽　□図画工作　□家庭
□体育　□その他

【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】　■有　□無